

看護の力を発揮したまちづくり～
「子ども未来フォーラム大阪～広げようパ
パの育児休業～」開催を事例に～

パパの育児休業支援センター

Q: なぜ、若い子育て世代がこういう地域での活動をしているのか。

A: 我々看護職は、パパの育児休業は特別なことじゃないと考えている。たとえば産後の女性は想像以上に心身ともに疲労しているので、パートナーの強力なサポートが必要である。このようなことを社会に訴えたい。看護の立場の者の声は情報発信不足もあり、社会に浸透していない。病院の中だけではなく、地域に出て行ってこの看護の声を届けたいというのが理由だ。

A: 給料は出るのか。

Q: マスコミでは精度が不十分などと、すごく誤解がある。例えば自分は大体給料が30万ぐらいだが、額面の半分、手取りの大体6割に相当する金額の8万の給付金がある。それに加えて、児童手当が1万5,000円もらえるので19万5,000円ぐらいになる。ここから税金や社会保険料を引かると確かに苦しいけれど、これらも一切免除されるので、手取りで20万弱ぐらいの給付金が担保されている。これを額面換算すればおよそ25万から27万円ぐらいの月収に相当する。海外旅行やぜいたくはできないかもしれないが、暮らすにはまずまずいけるんじゃないかと思う。

Q: 休んでいるときに仕事をしない不安はなかったか。

A: 自分が看護職だからかもしれないが、部署異動だというふうに思っている。そんなに大きなことではないという気がする。

Q: 活動は横に広がっていますか。

A: やはり地域とのつながりがポイントだ。いろんな機関が後援・応援してくださるが、そもそも最初は社協が応援してくれた。社協のホームページで、地域でボランティアをしている人を応援するという情報があり、そこにたまたまたどり着いて訪ねていったことから始まった。しかし、一般の僕らぐらいの世代の会社員が地域で活動したいと思ってもどこに相談に行けばよいのかわりにくいという現実があると思う。

A: 育児休業をとるパパさんは増えたというのは、具体的な成果だ。しかし、育児休業を主体的にとる男性がふえたといっても、勤務先は大学病院で、いわば親方日の丸だ。しかし、中小企業や個人商店では育児休業なんてもってのほかという雰囲気がある。中小企業や個人商店などではどう広がってきているのか。

A: 実は自分自身も簡単に育休はとらなかった。推進してるはずの看護職、看護の世界でさえもこれが現状だとすれば、一般企業のサラリーマンが周囲の理解を得て育休をとるのはもっと大変だろうと思った。そこを変えていかなければいけないと思い、こういう活動を始めるようになった。

例えば給料はどうなるのかという具体的な資料を提示して説明する必要もある。誤解によって手控えてる人は「それならとうとうと思います」という反応が返ってくる。

育児休業は法令上保障されているが現在の管理職世代にはなじみが少ないし、そのような保障制度も知らない人がいる。さらに、それを拒んだり期限制限すれば企業名が公表されるなどの罰則があることを知っている人はもっと少ない。そのあたりの認識をまず持っていただく必要がある。要は、子育て支援というテーマでありながら企業雇用問題でもあると我々は認識している。

「双葉町応援隊－KIZUNA－」被災地と心を一つに

京丹波町スポーツ少年団

- Q: スポーツ少年団は人員的にどれぐらいの規模か。
- A: 13団体だ。各団体の人数は10名から20名前後で、おもにホッケー、野球、競技スポーツを通しての活動だ。
- Q: 教育の面でどうなのか。また、地域の支援を受ける双葉町の方々がみずから立ち上がろうとするのはまさに教育とかかわるがどう感じているのか。
- A: 正直言うと、当初大人が方向性をつくり、その後子どもたちにやろうかとスタートしたが、2年、3年経ち、物資を送ったり被災地を訪問するなどすることに対して、子どもたち自身が喜びを感じている。人に対してやさしさを持つことが如実にあらわれているし、各団の中で高学年が低学年にしっかり教え、低学年の面倒を高学年が見る——ということがこの交流支援活動を通してつくり上げられたと思っている。
- このような支援や応援活動は、言葉は悪いが、押しつけという意味合いが発生してしまう。受けた方はやはり重荷に感じられる。そこで、双葉町の社会教育委員と連携して、彼らのやりたいこと望むことに対して、我々がどう応援できるのかという点から、今後かつ集うメニューを考えたいと思っている。



みんなで作ろう！防災かまどベンチ

防災かまどベンチ実行委員会

- Q: 我々でもつくられるか。
- A: 大丈夫、子どもでもつくられる。設計書もある。誰でもれんが積みができる道具を2つそろえている。左官屋さんなら糸を張ってやるが、そうしなくてもモルタルを一定の高さにきれいに積んでいくものもそろえている。
- Q: 防災かまどベンチだけか。5年経てば5年で終わるのであれば、今のかまどベンチ実行委員会がそれで終わりということだが、もったいない気がする。
- A: 管理は平群町で、協働でやっている。平群町の15の避難所を利用する自治会の方々に集ってもらう。自主防災組織の訓練に利用してもらったり、コミュニティの会合の場にさせていただく、井戸端会議の場にもしていただくということで、どんどん使ってくださいとしている。また、昨年度は避難所だけでなく、他の自治会で自主的につくった。自治会の要望があれば実行委員会からノウハウや人も資料も全部お届けするという形で、まちづくりの一つとしてやっている。
- Q: 防災かまどベンチ以外の事業をどう発展させていくのか。
- A: 1つは、主力部隊でもある、平群町のボランティア連絡協議会が毎年1月に竹あかりの集いをし、「防災」をキーワードにイベントをやっている。子どもたちを主人公にして災害のときにいかに避難すればよいか、非常袋に何を入れるのか、などの活動もあるし、災害非常訓練を実施することもある。
- とくに効果があったのは、日ごろ話することが減多にない行政と町民が、その機会にお互いに交流し、危ない箇所がわかるようになることだ。一つ一つ場で絆や輪を広げていく活動を進めている。

小さな自治体・東堅町のまちづくり
～地域社会のゴミ処理・現在社会の避けて通れぬ課題の1つ～

東堅町自治会文化委員会・
まちづくり部会

Q: 油でつくる石けんは今後はどういう形で広げるのか。

A: 自分が勝手にやっているだけ。つくるには劇薬の苛性ソーダが必要だが、とても危険なので薬局も売ってないところが多い。だから、業者に販売するか、我々のような理工系の人間がやろうということで進めている。後で配る手を洗うには大丈夫だが、顔は洗わないように。余り泡は出ない。

Q: NPOとの連携はどういうきっかけでやるようになったのか。

A: 我々はホームページを使っている。植林はボルネオなど海外でもやっている。これに限らず青年海外協力隊、植林青年隊などに参加したりする。町内に関係者がいるのでつき合いが広がり、CO2SOSとも連携している。要するに人のつながりだ。



郊外住宅地のボランティアまちづくり－
みんなの笑顔求めて－

星田山手ボランティア・街づくり推進会

Q: 課題は人集めだが、その前に人を選択するということだが、どういうふうにするのか。また、なかなか人がいないときにどうやって見つけるのか、あるいは育成するのか。

A: 1つは、とにかくイベントを連続して行うこと。そうすると人が集まってくる。例えば盆踊りをやるにあたって電気工事が必要になる。業者に頼まずやろうということになると、電気を配線する人を探してくる。この前、台風の時テントが飛び、支柱が折れたときも「わし、溶接やったことがあるから、溶接できれいに直そう」とか。

いろんなところで、行事、イベントをどんどんやればやるだけ、やれそうな人が集まってくる。次も何かやってくれないかと頼めば喜んでやってくれる。そうして今、私どもは102名の人ボランティアが集まってくれている。

Q: 星山は全部で何世帯あるんですか。

A: 2自治会があって、700世帯ほどあります。

とにかく明るくやることと、私を支えてくれている副部長や次長、メンバーとの連携が大切だ。ですね。自治会などでは異論を唱える人もいるが、この中ではそういった人も受け入れながら前へとにかくいける人間を集める。何かしようと思ったら、すぐにみんな一緒にやっていく、そういう人の集団にしていくことが大切だ。

また、公の行事をしていくことによって市長に来てもらえば、我々が偏見を持った集団でないことをよく理解してもらえる。子どもも大切で、子ども対象のことを行うと親が来る。そしておじいちゃん、おばあちゃんも来ると、新しい交流が広がる。

箱の浦まちづくり協議会の活動報告

箱の浦自治会まちづくり協議会

Q: 星田山手も空き家が40軒強あり、その活用方法に悩んでいる。そのようなサロンに活用するという話はあったが、リフォームするなどお金がかかる。どういうやり方をされたか。

A: 家賃は固定資産税プラス若干の費用としている。泣きの涙で届けをし、最後は私どもの活動も理解いただき、固定資産税プラス月5,000円と水道光熱費とした。我々は全部自前で賃貸をして運営している。

売り上げはサロンが年間五十数万円
お助け隊も三十数万円ある。

A: 草刈りは幾らか。

Q: シルバーボランティアよりも割安に実施している。

A: 活動に対しての行政の補助などを教えてほしい。

Q: 我々のような活動は本来、行政や社会福祉協議会が取り組むのが通常だと思っているのでも、自分が今兼務している自治会長として行政や社協にもぶつけたが、全然反応がない。

年末に朝市活動に対して大阪商工会議所から大賞をいただいた。これが市の広報に載り、他地域でもやりたいという申し出が来ている。前へ一歩進めていくのが大切なのに、私どもの市は遅れていて、行政が我々の活動の後追いをしている状態だ。共済のしおりも、我々の自治会と協議会で合作でやった。これを見た市長が非常にびっくりし、担当幹部に何らかの形で支援するよう指示した。我々は阪南市の一つの起爆剤になればよいという意識で取り組んでいる。

